平成 28 年　6 月 18 日

山梨県知事 殿

本人氏名　豊泉　元歌
留学先　イースタン・ケンタッキー大学
留学期間　2016 年 8 月 15 日から 2017 年 5 月 20 日

研究の課題（テーマ）

多様な価値観を受容し、それぞれの個性を生かす教育を推進することや、障害のある児童生徒の自立と社会参加を進めるための解決策について

提出内容

与えられた県政の課題（テーマ）の解決に導く考え方及び対応策等

多様な価値観を受容し、しょうがいのある人を含めた一人ひとりの個性を尊重する社会にするためには、家族と過ごす時間を楽しみ、人を自分と同じように人として尊重することだと考える。私は、アメリカで時間の使い方や宗教を含めた文化の違いなどの多様な価値観を体験し、自分が工夫をすることでその多様な価値観を受容できることを学んだ。そして、その経験から、多様で柔軟な教育システム、個々に合う学習方法と、教師の広い視野と経験の 3 つの観点から、日本で個性を活かす教育を行うことについて考えた。

しょうがいのあるなしに関わらず、人は人である。人を尊重するためには、まず、自分のことを尊重できることが大切である。そのためには、無償の愛を注がれ、ありのままの自分を認められる体験が重要である。家族の関わり合いを基本として、他人を尊重していくことが、最終的には、しょうがいのある児童生徒の自立と社会参加につながると考えた。

添付書類

詳細について、図・表・写真などの資料も含めてＡ４縦版５枚以内にまとめて報告してください。

※パソコン・ワープロの使用可（使用する文字は１２ポイントとしてください。）

※図・表・写真等を用いて可

まず、多様な価値観を受容することについて述べる。アメリカにはアフリカ系やヒスパニック系など様々な人々が暮らしているため、私は留学中に、とても様々な価値観の違いに触れた。その中でも特に、時間の使い方、個人主義か集団主義かと、キリスト教の考え方の 3 つの価値観の違いについて述べる。

一つ目は、時間の使い方について述べる。日本人である私とアフリカ系アメリカ人やメキシコ出身である友人の時間の使い方が異なっていた。なお、ここでは、全てではないが、私が付き合った中で、一つの特徴として人種別で比較している。それは、私が関わった人々の共通点を考える上で、人種という分類が適切ではないかと考えたためである。その友人は、誰かと待ち合わせをする際に、とても直前に誘うのである。例えば、一緒にサッカーをした時には、「何時にどこでサッカーをするか」というように約束するのではなく、「明日サッカーするけど来ない？」とか、「今からサッカーをするから、もしよかったら来て。」という様子なのである。また、私は、1 日の時間を計画してから過ごすが、メキシコ出身の友人は計画は立てずに、とても自由度の高い過ごし方をしている。私は、そのような価値観の違いがあることがわからなかったため、初めのうちはそのような時間の使い方の違いにストレスを感じてしまうことがあった。しかし、相手の価値観や行動を変えることはできないので、自分がいかに工夫をすればその友人と気持ちよく付き合えるのかということを考えた。そのような友だちと予定を立てるときには、いくつかの選択肢を作るようにしたのである。今までは、人と会う約束をした際は、他の予定を入れずにその日を開けておくことが当然であったが、それではうまくいかないので、私もいくつか予定を入れておき、時間があれば参加するというような方法を取っていた。事前に全て予定を細かく決めておく日本人と、場当たり的に物事を進めることが多いアフリカやヒスパニック系の人々との価値観の違いは、私の友人と関わる際の学びになった。

二つ目は、個人主義が集団主義かについて述べる。全体の傾向として、アメリカは個人主義の文化が強く、日本は集団主義の文化が強いのである。そのため、アメリカでは個々が独立して意思決定をするが、日本では相手の行動を伺いながら、自分の意思決定を行う。個人主義は、個々が自立しているが、他人の考えや気持ちに寄り添うことが難しいともいえる。また、集団主義は、他人の考えや気持ちに寄り添うことができるが、個々の意見が持ちにくいともいえる。個人主義の文化が強いアメリカで、集団でスポーツをしたときには、知り合いであるかないかなど関係なく、そのスポーツをしたい人々が自由に集まった。そのような集団では、個人の意思決定が尊重されるため、一緒にいてとても心地がよかった。一方、集団で行動するという意識が弱いという特徴が短所になったことがあった。サッカーなどのある程度人数が必要なスポーツでは、個々人が自分の好きな時間に帰宅してしまい、人数不足のため、それを十分に楽しめなくなってしまうこともあった。個人主義にも集団主義にもそれぞれ長所と短所があるということがわかった。

三つ目、文化の違いについて忘れてはならないのがキリスト教である。アメリカでは、キリスト教の文化が広まっている。至る所にキリスト教の協会があ

り、日曜日には多くのキリスト教徒が協会に集まり、祈りや交流を行う。私が日本にいる頃は、キリスト教というものについてあまり馴染みがなかった。しかし、私の友人がキリスト教を信仰していたため、その人を知ろうと関わっていくうちに、その友人と教会へ行ったり話をしたりしていろいろなことがわかった。キリスト教徒にとって、全てのものや行動の源はイエス・キリストであり、人生の拠り所としてとても熱心に信教していた。ある友だち C さんは、今までは自分の夢はプロ野球選手であり、どうすれば人気になることができるのかというような、とても自己中心的な考え方をしていたそうである。しかし、イエス・キリストと出会い、夢が変わり、他人を思いやる自分に変わったと言っていた。聖書は、自分がどのような人になりたいのかや、試験に落ちてしまったときなど、日常の様々なことについてどのように考え、克服していけばよいのかについても書かれていることを知った。また、祈りは、イエス・キリストとイエス・キリストがもたらす（キリスト教徒はそのように考えている）日常の人々との関わり合いなどについて感謝をすることが多かった。誰かが困っていると、その人のために祈りをすることもあった。キリスト教徒にとって、イエス・キリスト、聖書、祈りが日常のあらゆるところでとても密接に関係していて、なぜそれらを大切にしているのかということがよくわかった。

以上のことから、価値観を受容するということは、相手のことを知ろうと耳を傾け、相手の育った環境や文化を考慮したり、お互いに気持ちよく過ごしていくために自分にできる工夫をしたりすることだと考える。

次に、そのように価値観を受容し、個性を尊重する教育を進めるために、多様で柔軟な教育システム、個々に合う学習方法と、教師の広い視野と経験の 3 つが重要ではないかと考える。

まず、多様で柔軟な教育システムについて、大学では、専攻替えの柔軟性が必要ではないかと考えた。アメリカでは、学生が大学在学中に自分の興味のあることに挑戦するため、専攻を替えることが珍しくない。私の友人である C さんは、1 年次にはスポーツ科学を専攻したが、2 年次には教育、そして、3 年次には宗教を選択した。実際に専攻してから、自分が考えていた内容とは少し違うと感じ、新しく興味が湧いたことを学ぶため、学部を変更したのだと言っていた。彼はキリスト教徒であることもあり、今は、3 年次から学んだ宗教のことを活かしながらキリスト教の宣教師のような職業へ向けて歩んでいる。私は、柔軟性について、日本とアメリカの職業に対する考え方や文化の違いが関係していると考えた。日本にいる大学進学者の場合、高校で将来の進路と専攻を決め、大学在学中に就職活動を経て、新規卒業の学生がどこかの会社に就職することが一般的である。そして就職後は、会社が新規卒業者を一人前に育てていくという傾向がある。しかし、アメリカにはそもそも就職活動と言われるものがない。そのため、会社が新規卒業者を採用することや、一人前に育てるような考え方もほとんどない。アメリカも州により特徴が大きく異なるため、全体がそうであるかはわからないが、私が通っていたイースタン・ケンタッキー大学では、大学在学中に様々なことを経験できるように専攻の変更やインターン、ボランティア活動を積極的に行える機会や文化があると感じた。日本の文化の

ように、一度決めたら最後までやるというような精神も大切である。しかし、自分が思ったり考えたりすることと、実際に行うことは異なる。実際に学んでから、自分には合わないと感じたり、考えていたものと違ったりしたときには、積極的に新しい選択をすることができる。そのことは、自分が真剣にやりたい職業を探していく上でとても価値のあることだと考える。

では、個々に合う学習方法について、これは個性を活かす教育を進めることに直接関係することである。学習方法は、話す、聴く、見る、書くの 4 技能があると考える。また、人により得意な学習方法がある。私の場合は、見て理解するということが得意であった。私が留学中は、アフリカの音楽や人類学などの教科も受講したが、教科書の内容に関する私の背景知識が少なかったため、文字としての意味を理解しても、内容の理解は難しいことが多々あった。私の学習補助の方は、私が絵を見て理解することが得意であるとわかってから、積極的に絵を描いて内容を説明してくださった。何度言葉で説明されても理解することが難しかったことも、一度絵を見ればすぐに理解できることが多かった。では、個々に合う方法を見つけて実践していくにはどうすればよいか。それは、教師等の教育者が、いろいろな学習方法を試し、個々の学習方法に合わせて効果的な方法で教育することだと考える。教育者が学習者に合う学習方法を見つけて教育を行うことで、個々の能力を最大限引き出し、個性を活かす教育につながると考える。

教育者が教育方法を工夫することに加え、教育者自身に広い視野と経験があることも大切である。なぜなら、教育者自身のものの捉え方と経験は、教える内容の理解と児童生徒の捉え方に強く影響するからである。前者について、例えば、同じ教科書を読んでいても、注目することや、教科書の内容から考えることは、人により異なる。内容は、自分の物の捉え方を基準にして考え、自分の経験から、より現実味を帯びた知識として吸収される。そのため、広い視野と様々な人生経験があることは、とても広く深いレベルでの教授につながるのだと考える。後者について、教育者は、個々に異なる性格と特徴をもつ児童生徒に教育を行う。そのため、そのような児童生徒たちの個性を様々な面から捉えられることが、個性を活かすことにつながると考える。例えば、物事を素早く効率的に行えることを重視し、計算が速く、短時間に何枚もプリントを終わらせられることができる児童生徒は、計算が得意だと感じることができる。教育者は計算が得意な子としてその子を捉える。しかし、計算の過程についてじっくり考えて取り組む児童生徒は、他の児童生徒に対し、プリント数枚しか終わらなかったことで、計算が得意ではないと感じてしまうこともある。そのときに、教育者がその子のことを、計算の過程をじっくり考えて解くことが得意であると捉えることができれば、計算が苦手な子として捉えることは無いのである。また、計算の過程に注目してその児童生徒に声をかけることもでき、その児童生徒は、自分の得意なことを知ることができる。つまり、個々の個性を活かすことができるのである。

最後に、しょうがいのある児童生徒の自立と社会参加を進めるための解決策について述べる。まず、しょうがいをもつ人々に対する捉え方の違いがある。それは、前述したように、アメリカ社会と日本社会の文化が違うからである。一般的に、アメリカ社会は個人主義で、日本社会は集団主義である。そのため、アメリカでは他人と「異なる」ことが、日本では他人と「同じ」であることが重要視される。このことは、自分とは異なる考え方や様子、行動をとる人に対して、どのように反応するかに影響する。問題は、日本で暮らす多くの人々が、自分とは異なる人々に対して、同じであるように促すか、または、遠ざけてしまうことだと考える。

しょうがいのあるなしに関わらず、人は 1 人ひとり異なるということを念頭に置いて、どのような人々も、1 人の人として尊重することが大切であると考える。そこで、対応策として私が提案するのは、家族の時間をたくさん作ることである。家族が社会の源であることと、個人は家族の影響を一番強く受けることがその理由である。家族はとても重要で、両親の子どもに対する考え方や家族間の関わり合いが、子どもの成長に積極的に働くか、消極的に働くかに影響する。家族が安定していると、子どもも安定する。つまり、家族で過ごす時間を多くとることで、家族間で関わり合いが増える。子どもをかけがえのない存在として慈しむこと、子どもが色々な人々と関わり合い、ありのままの自分を認められることで、その子どもの自尊心が育つ。自尊心が育つと、自分とは「異なる」他者に対しても尊重する気持ちが生まれる。そのため、自分と家族だけではなく、それ以外の人である周りの人々に対しても尊重するようになると考える。今の日本社会は、大人がとても忙しそうである。家族とどれくらいの時間過ごしているのであろうか。確かに、経済的に余裕がなく、家族の時間をたっぷりとることが難しい家庭もあると思う。しかし、全体的に見て、日本の社会はとても忙しい。社会全体が家族と過ごす時間を大切にしているかどうかは、アメリカと日本では異なる。アメリカでは、金曜日にはほとんどの店が普段よりも早い時間に閉店し、多くの人々は余暇の時間を大切にする。アメリカの大学生や、お世話になった友人の家でも、家族で過ごす時間をとても大切にしていた。日本の社会が今よりも家族を大切にするように変われば一番嬉しいが、それを今すぐに行うことは難しい。私を含め、今からできることは、家族といる時間を積極的に作ること、たとえ限られた時間しかなくても、その家族と過ごす時間をより味わい、豊かにすることだと考える。例えば、外食で済ませずに、たまには家族皆で料理を作ったり、いつもつけているテレビを消して会話を楽しみながら夕食を食べたり、帰りが遅くなるとわかっていたら、手紙を書いて家族内文通をしたりするのである。大切なのは、無理をしないで、楽しむことである。家族と過ごす時間が楽しくなれば、意識をしなくても自然に家族と過ごす時間が増えてしまうからである。

多様な価値観を受容し、一人ひとりの個性を尊重する社会にするためには、家族で過ごす時間を大いに楽しむことである。そして、色々な人々と関わり合いながら、人を自分と同じ「人」として尊重していくことである。

私の友人とその家族と一緒にゆったりと家族団らんの時間を過ごした。

イースタン・ケンタッキー大学に通う友人と寿司パーティーをしたときの写真
キリスト教を信仰しており、一緒に教会に行ったり、キリスト教について話をしたりした。